慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	ミャオ族の村落社会における2種類の宗教的職能者： 中国貴州省東南部雷山県の事例
Sub Title	Two kinds of religious practitioners in village community of Miao : a case study of Leishan in Gizhou Province, China
Author	陶, 冶(Tou, Ya)
Publisher	慶應義塾大学大学院社会学研究科
Publication year	2004
Jtitle	慶応義塾大学大学院社会学研究科紀要 : 社会学心理学教育学 : 人間と社会の探究 (Studies in sociology, psychology and education : inquiries into humans and societies). No.59 (2004.) ,p.67- 79
JaLC DOI	
Abstract	The present study attempts to give an example of analyzing the connections between the two kinds of religious practitioners (shaman and priest) and the situation of patrilineal lineage in a village community of Miao in Guizhou Province, Southwest China, which is as an unit of exogamy. In the first part of this study, it was the exposition about the folk concept on related matters. The second part reached the conclusion through the concrete contrast, how the practitioners are relevant to social organization and kinship. The third section gave a description of the ability and function of both of kinds of practitioners in rituals, especially the each steps of funeral. The most significance in this study is that an illustration has been discovered, that the two kinds of religious practitioners, who only belong to lineages that is not the early settler into the village, are named the same as "ashan", by local people. And the distribution of the two kinds of practitioners in lineages revealed the relationship of power between each "ze", which is the patrilineal lineage (descent group) of Miao in the village. Moreover, it is developed to the research on religion of Miao that both the data and argument in this paper are about the practitioners and their spiritual power in respective rituals.
Notes	論文
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN0006957X-00000059-0067

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

ミャオ族の村落社会における2種類の宗教的職能者
——中国貴州省東南部雷山県の事例——

Two Kinds of Religious Practitioners in Village Community of Miao
—A Case Study of Leishan in Gizhou Province, China—

陶　　冶*
Tou Ya

The present study attempts to give an example of analyzing the connections between the two kinds of religious practitioners (shaman and priest) and the situation of patrilineal lineage in a village community of Miao in Guizhou Province, Southwest China, which is as an unit of exogamy. In the first part of this study, it was the exposition about the folk concept on related matters. The second part reached the conclusion through the concrete contrast, how the practitioners are relevant to social organization and kinship. The third section gave a description of the ability and function of both of kinds of practitioners in rituals, especially the each steps of funeral.

The most significance in this study is that an illustration has been discovered, that the two kinds of religious practitioners, who only belong to lineages that is not the early settler into the village, are named the same as 'ashan' by local people. And the distribution of the two kinds of practitioners in lineages revealed the relationship of power between each 'ze', which is the patrilineal lineage (descent group) of Miao in the village. Moreover, it is developed to the research on religion of Miao that both the data and argument in this paper are about the practitioners and their spiritual power in respective rituals.

I. 問題の提起

シャーマニズム研究において，シャーマン(shaman)と祭司(priest)をめぐる論議は，さまざまな社会でのモデルの比較分析（Mandelbaum, 1964; Lewis, 1978; 佐々木，1983, 1992, 1995），シャーマンと祭司の分化の関係に着目する社会基盤の分析（桜井，1979; 佐々木，1988），儀礼の分析による権力との関係についての考察（田中，1990）などのようにさまざまな方向に展開している。シャーマンと祭司の関係を単純に対比すると，神人関係についての相互交流／一方的接近，儀礼における意識のトランス／平常の状態，地位の継承における獲得／世襲による継承，技能の習得に関しての召使／学習，個人的能力／系譜的威信や，個別的／全体的機能などのように，図式化できる。しかし，この発想は研究者のもので，現地人にとっては意味をもたない。つまりこれらの研究は，呪術—宗教職能者の実態を特定

* 慶應義塾大学大学院社会学研究科博士課程

の社会集団における民俗宗教的な現象として捉えきれたとはいえない。

ミャオ族の村落社会における宗教的職能者についての議論は，以上のような研究を展開して，儀礼における公共的な性質と個人的な性質の区別を強調するだけにとどまる (Diamond, 1988)。この議論は民俗概念や村落史や社会構造など具体的状況を全く考慮せず，何の説明にもならなかった。

本考察は，従来の研究を批判的に検討して，中国貴州省のミャオ族村落社会に焦点を当て，民俗概念と儀礼の説明に基づいて，2 種類の職能者の能力や役割についてと，親族組織との関係を検討する試みである。

本稿のデータは，2002 年 8 月上旬～9 月上旬までと 2003 年 9 月上旬～10 月上旬まで，そして 2004 年 9 月下旬の短期滞在を含めて通算約 2 カ月半の間，中国貴州省黔東南ミャオ族・トン族自治州雷山県大塘郷 S 村を中心に行った実地調査に基づいている。

II. 調査地の概況と関わる民俗観念

1. 「ガノォウ」人の村の概況

本論の調査対象となったのはミャオ族の一支系である「ガノォウ」（自称）ganou で，黔東南ミャオ族・トン族自治州の雷公山地区に住み，主として雷山県の大塘郷と丹寨県の排調郷に分布する（地図 1)。人口に関する精確な統計数字はないが，約 20 万人以上である。「ガノォウ」とは，「鳥」を意味する。ミャオ族の他の支系と比べれば，女性の服飾に関してスカートが短いのが目立ち，「短裙ミャオ」という他称で呼ばれている。

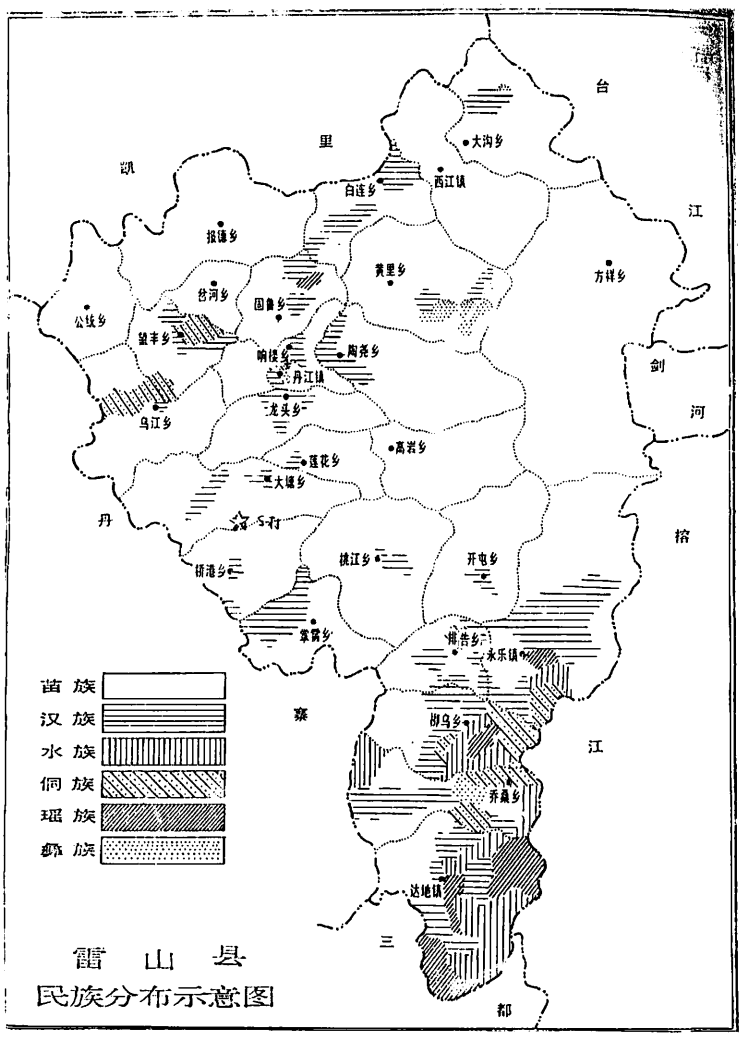
調査地となった S 村は，戸数 290 戸，人口約 1224 人（2002 年 8 月）という大規模な集落で，海抜約 900 メートルの山腹斜面に個々の家屋が密集した集村形態をとる村である。全人口の内ミャオ族は 95.8% を占める。主要な生業は，稲作を中心とする農業を営んでいる。農業といっても，山間部の低盆地や河谷を主体として水田を営む平地と，山腹斜面を開墾して造成した棚田や段々畑では，その形態が少し異なっている。一部の水田ではコイなどの養殖も行われている。山腹斜面の場合，天水利用の棚田では水稲耕作が，段々畑では焼畑が営まれて，トウモロコシ，イモ，陸稲などが主として栽培されている。家庭では豚，牛，犬，ニワトリなどの家畜の養殖が行われている。また一部は剰余労働力として長期にわたり近くや遠方の都市で出稼ぎに従事する。S 村とその付近の村落は，西南中国においても貧困地域である。ようやく 2001 年に県の町につながる簡易道路が完成した。

S 村の 290 世帯の家族形態は一夫一妻制の父系拡大家族か核家族の形をとる。親族関係は父系制で相続は末子継承により，一般には家族の成員が 3 世代を超えない。婚姻規制は外婚が原則とされ，その単位は村である（村外婚)。そのために村内では同姓や異姓を問わず，通婚が禁じられている。村の中で同世代の人々は「ジダイ」jidai（兄弟の意味）と自称する。それは，昔の大規模な祖先祭祀であるナオニョ naonyo「鼓社節」[1] の単位となっていた。

S 村には，多くの信仰対象がある。祭られる岩石は四つあり，そのうちの三つは子がうまれるように願をかけ，一つは耳の病の除去の祈願をする。また，崇拝される樹木もいくつかあり，子供の病気を治す祈願をする。村の両端には，村人全員の安全と健康を守護するために金を集めて小祠を建て，土地神と虎を祭っている。

2. アシャン asyan（宗教的職能者）とダムイ damui（守護霊）

ミャオ族の社会の宗教職能者は漢族から「鬼師」と呼ばれているが，「ガノォウ」人の村落においては，



地図１　調査地となる村の位置☆
出典：『雷山県誌』貴州人民出版社

アシャン asyan と呼ばれ，「師匠」の意味で，金属加工や薬草採取などができる師匠と同列に並べられ，人間界と霊界の媒介者と見なされる。ただし，アシャンがもつ能力は勉強や訓練を通して身に付けるものではないという観念がある。また，アシャンたちは通常の生業から完全に離れた独立した職能者ではない。

アシャンの能力は主として死者の力に支えられて初めて有効だという強固な信念に基づいている。アシャンは，守護霊ダムイ damui をもつ。守護霊ダムイとして特定の個人または集団と持続的な関係をもつ死者（祖先など）は，呪術師の霊的な能力の源泉となる。一般的には，アシャンを務めていた祖先のもつダムイ，あるいは祖先をダムイとして継承したアシャンは，その神秘的な力を受け取り，その力に関して責任を負わなければならないという。

村社会において，宗教的職能者は一律にアシャンと呼ばれているが，アシャンの各自がもつダムイによって2種類に分けられる。一つの種類は，普通のダムイをもつアシャンで儀礼において，ダムイを憑依させたり霊界（フォヒョウ）に赴いだりする能力をもち，いわゆるシャーマンに当たる。これをアシャンA型とする。一方もう一種のアシャンは，村人にダムイソ damuiso（白いダムイという意味）をもつと見なされるアシャンで，儀礼においてトランス状態(trance)にならない，祭司（プリースト）に近似的なタイプである。これをアシャンB型とする。前者の場合には，守護霊ダムイを，アシャンが設けた祭壇に紙で剪んで人間の形にして祀り，その対象をヒュダ hyuda という。一般的には，ほかの霊的存在がヒュダという形で表現される場合もある。例えば，豚の霊的存在がヒュダの形で儀礼に祭られることがある。ダムイ damui は，職能者の霊的能力の源泉であり，職能者がダムイ damui をヒュダ hyuda として可視化して祀らなければならない。

また，2種類のアシャンのほかに，儀礼においてはラン ran と呼ばれる役職もあり，儀礼に関連する知識を熟知し，アシャンの助手として参加する。

3. 儀礼と関連する精霊，霊魂，空間的観念

①ヒョウ hyou（精霊）と様々な霊魂

霊的存在の総称を，ヒョウ hyou という。動物，植物，火などの自然物（現象）のヒョウがあるほかに，人間と人間のある種の行為もヒョウを発生させる。ヒョウは種類が甚だ多く，いくつかの集団があると認識され，そのなかが性別で分けられる場合もある。例えば，牛の霊的存在は，ヒョウニョウと呼ばれ，雄と雌の二つの集団に分けられ，祀る際に供物が別々に厳格に規定されている[2)]。ヒョウは，，季節の平安，生産の豊穣，人と財産の繁栄を守ってくれるので，供犠と祈念の対象となり，常に恐ろしい存在であると認識される。人間の生者の霊魂はガオヒョウ gaohyou という。

一方，チュウ tyuu は，人間の死んだ後に災厄と病気および異常な事象をもたらす源となる存在（死霊）であり，慰撫の対象や駆除の対象となる。人間の病気は，患者の霊魂のガオヒョウが死霊のチュウに奪われた結果と見なされる。病気治療の最終的な目的は，患者の身体と霊魂の調和を築くことで，患者の身体から奪われた霊魂を取り戻したり，霊魂を身体に固定させたりする。

人間が死んだら，霊魂のガオヒョウは三つに変化するという。死体が埋葬された後に，(1) 家に戻って家を守り，子供たちを保護する，(2) 埋葬された墓を守る，(3) 祖先の発祥地に送り帰され，「調べ」を受けたのち，生まれ変わって現世に戻り再び人間になる，と考えられている。異常死の場合（自殺，事故ための死亡，未成年の死亡，激烈な伝染病ための死亡など）には，死者は祖先ではなく死霊のチュウになる。死霊のチュウは，祖先の発祥の地に戻れずに現世に転生できなくなり，専ら人に祟ると考えられる。祟られた人物は，霊魂のガオヒョウが奪われて身体から離れ，異常な行為を執拗に繰り返すようになったり，重病にかかったり，その屋敷をさまざまな災厄が襲ったりする。チュウは災厄をもたらす死霊である。

②霊的存在に関わる空間的観念

天界と人間界

「ガノォウ」人には至高神と言う観念はないが，死者の霊的存在は人間がいる世界に対して別の空間にいる存在と認識される。人間界のフォダ foda（下にある場所の意味）に対する天界のフォワ fowa（上にある場所の意味）にいるという対立的な認識をもっている。ただし，フォワには祖先の霊しかいないとされる。

そして，現世ギワ giwa（上にある所の意味）に対して他界ギダ gida（下にある所の意味）という対立観念がある。ギダは祖先以外の死者がいる場所であると認識される。

霊界　フォヒョウ fohyou

現実の世界に対して，死者が含まれる霊的存在がいる場所は，霊界フォヒョウ fohyu と呼ばれ，人間界に対して別の空間で，普段は生者が到達できないところである。アシャン A 型だけは普通のダムイをもっているので，現実な世界と霊界フォヒョウの間を行ったり来たりできる神秘的な力をもつと認識される。

霊の路　ゴンヒョウ gonhyou

正常に死亡した死者が変化した三つの霊魂のうち一つは必ず祖先の発祥の地のゼニョ zenyo に行くはずだという観念がある。その行程は，ゴンヒョウ gunnhyou と呼ばれ，祖先が村に遷移してきた道筋である。ゴンヒュウは現実的に村とその周辺にあって祖先の遷移の道筋に当たる場所を指し，住宅を建てることは禁止される。

③チュヒョウ tyuhyou（儀礼）

「ガノォウ」人の村落において，宗教的職能者アシャンによって執行される儀礼は，チョヒョウ tyohyou と呼ばれ，精霊ヒョウを使ったり操ったりするという意味である。儀礼用の道具として，茅，紙の旗，紙の人形，小竹枝，樹皮を使って，山河日月と各種のヒョウを表す霊域を簡単的に設ける。何のチュウが祟ったか，呪詛あるいは邪術にかけられたのかを探る方法は主として，占卜（ピャンロ pyanro，小竹を投げるという意味）とトランス（モガヌォ moganuo，「あちら」に行くという意味）の2種類である。ピャンロはどのアシャンでも用いる方法であり，具体的には小竹，米，卵，病人の着物を使って占う。モガヌォは霊界フォヒョウに赴くという意味で，普通のダムイをもつアシャン A 型のみが行うことが可能で，もっとも大きい神秘力の印となる。

モガヌォの儀礼においては，線香の灰を呑みこむ以外には薬のようなものは一切使わない。儀礼の手段は，専ら呪文を唱えることであり，家畜を供犠として使う。普通のダムイをもつアシャン A 型の場合に神秘力の象徴である刀（ダムイとなる祖先から継承したもの）を使用する。

4.　祖先と家族

祖先はニェイノウ nyeinou といい，父系の男性の死者を指す（たまには，ガオタタ gaotata と呼ばれ，高祖父の意味でもある）。その霊的存在は，ボンニョン bonyon と呼ばれ，子孫には善きヒョウとされ，家族の守護霊として祭祀しなければいけないのである。アシャンが儀礼を主宰するに当たっては，最初に祖先を祭り，その加護と以後の安寧を祈る慣わしがある。一般の村人は食事の前にご飯と肉を少しつまんで地面におき，さらに酒を少し地面にまいて，祖先ニェイノウに先に召し上がるように進めて敬意を表す。祖先は生前もっていた職能を子孫の誰かが継承，相続することを要求する。この場合には，選ばれた人物がその要求を受け入れれば，祖先はその人物の守護霊となり，祀る者と守護する者という永続的な人格的関係を確立する。「ガノォウ」人の社会においては，祖先とのつながりの観念は漠然としている。つまり，祖先による守護はかならずしも祭祀と尊敬の結果とはいえないし，また，祖先への祭祀をしないと制裁とか罰がもたらされるとも言い難い。

葬式などの儀礼において，参加者の主な単位となるのはゼ ze で，世帯の居住単位でなく，共通の祖先のニエイノウから分化した系譜によってたどられる父系リネージ lineage である（漢語で言えば「房族」に当たる出自集団）。

III. 2種類のアシャンの構成，継承と親族

調査地であるS村における家族は，向，蒋，白，張，韓，莫，王，姚という八つの姓によって構成されており，「向」姓と「蒋」姓の家族は，村の開祖と伝承されている。「白」姓，「張」姓の家族は人口がもっとも多いが，村の第二次入植者である。「王」姓と「姚」姓は漢族であり，近代に移民してきた家族である。しかし，共通の祖先の姓によるまとまりよりも，父系リネージの「ゼ」によって認識される単位の意識が強いために，同姓でも「ゼ」でない場合が少なくない。つまり家族の範囲と世帯の居住単位とは一致せず，同姓によるまとまりより「ゼ」という観念が強い。

S村は290戸であわせて1224人であるが，呪術師アシャンあるいはその助手ランを勤めた経験があったのは約20人で，常にアシャンとして村人に頼まれるのは8人である。その内訳は，男性7人で，女性1人である（2002年現在）。8人のうち6人のアシャン（白氏C〜D，韓氏，金氏）は，普通のダムイをもち，霊界フォヒョウに行ける能力があり，アシャンA型である。ほかは，張氏アシャンの2人で，ダムイソしかもたないために，モガヌォという能力をもっていないアシャンB型である。張氏の2人のアシャンは，一般の霊への祈願と悪霊祓いの儀礼だけを行う。「ゼ」という父系リネージの観念によれば，S村において，白氏と韓氏の世帯は三つのゼに属し，アシャン白氏CはゼI，白氏Bと白氏CはゼII，白氏Dと韓氏はゼIIIと各自が三つのゼの成員である。金氏の女性のアシャンは村外から向氏のゼに嫁いできてゼIVに属する。張氏Cと張氏Bのアシャンは，張氏世帯のゼVにそれぞれ属す（表1参照）。村の外来者である金氏を除けば，A型とB型の2種類のアシャンは村世帯の主体となる人々で，しかも人数もっとも多い第2次入植者である白氏と張氏の二つの集団に各自的に分布する。そして，三つのゼという父系リネージにおいては，各々のゼに宗教的職能者アシャンが存在する。

霊界フォヒョウとの連絡の媒介を務めるアシャンA型になる契機は，白氏と金氏5人の場合には，祖霊をはじめとする守護霊ダムイに憑かれることによる病気とその治療をきっかけに「ダムイを伝えられてもらった」（ダムイトdamuitoと呼ばれる）とされる。韓氏の場合には，山谷の小河に流れに逆らって

表1　S村宗教的職能者アシャン資料（2002年）

リネージと姓氏		年齢	性別	教育レベル	アシャンになる契機など
ゼI	白氏A	55	男	文盲	39歳の頃，病気を通して，岳父から守護霊ダムイをもらった。
ゼII	白氏B	74	男	文盲	41歳の頃，病気を通して，祖父から守護霊ダムイをもらった。
	白氏C	61	男	小学校	18歳の頃，病気を通して，祖父から守護霊ダムイをもらった。
ゼIII	白氏D	28	男	中学校	守護霊ダムイをもつ，ほかの資料は欠如。
	韓氏	40	男	小学校	38歳の頃，川に丸い玉石を拾いを通して，守護霊ダムイをもらった。
ゼIV	金氏（向氏嫁）	56	女	文盲	27歳の頃，病気を通して，実家の伯父から守護霊ダムイをもらった。40歳から従事し始める。
ゼV	張氏A	74	男	文盲	共産党員，ただダムイソもち，27歳から従事。
	張氏B	66	男	中学校	ただダムイソもち，62歳から従事

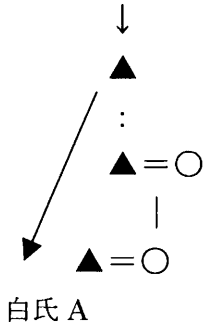


図1　アシャン白氏A継承系譜

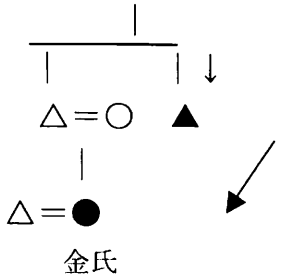


図2　アシャン金氏の継承系譜

自分に転がってきた丸い玉石を拾ったことを通じて，「ダムイをもらった」と語る。張氏2人のアシャンB型は，祖先の中にアシャンを務めたものがいて，先輩のアシャンの助手ランを務めて儀礼の規範と呪文を熟知することで自然に公認されて村人に「ダムイソもち」と言われるようになった。いずれも，アシャンについて修行を積んだことによるのではなく，霊的な力が家系のはじめから受け継がれたり，当人の避けることのできない運命だったり，村人に霊的な力のしるしを認められたりしたのある（表1, 図1-3参照)。

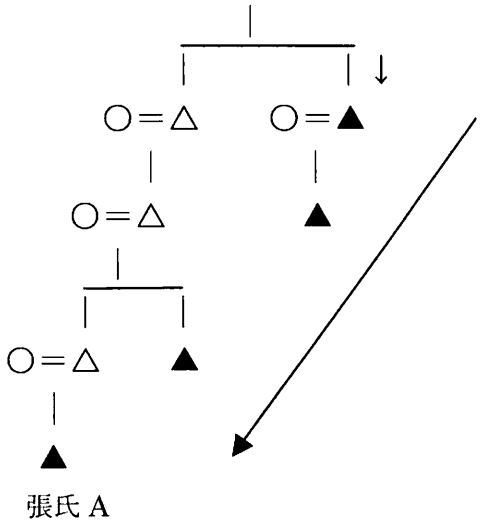


図3　アシャン張氏Aの相伝系譜

IV.　2種類のアシャンとさまざまな儀礼

S村の村人の日常生活の中では，社会関係に関わる問題の解決や，人間と家畜の病気の治療や，災厄の真実と原因の解明のためにアシャンに頼んで儀礼を行う。それだけではなく，人々は長く儀礼を行っていないと，特に強い理由がなくても，「アシャンに頼みたい」という動機でその儀礼を行うことがある。しばしばこまごまとした事柄に至るまで，儀礼を行う。例えば機嫌を損なわれたり，ただの祈願のためにも，アシャンに頼む。儀礼の際に，事情によってモガヌォが必要かどうかを判断し，A型かB型の2種類のアシャンをそれぞれ選ぶ。具体的に依頼するのは，以下のいくつかである。

1.　鼓社祭

ナオニョ naonyo といい，鼓を食うという意味で，12年ごとに1回（丑年）行う祖先祭祀の行事である。祖先に供える牛を殺す際に，2種類のアシャン両方ともに牛の魂（ヒョウニョウ）を祖先の方へ導いていく担い手として頼まれる。S村の場合は，政府の禁止令のために40年以上儀礼は行われなかったが，最近国家政策の緩和によって村民自治委員会と村の住民は伝統の回復と地域振興を目指して，次の丑年（2009年）にナオニョを行うつもりである。

2.　掃案

チェガン tyegann という。村の悪霊のガシャチュウのうち，特に火災をもたらす火の霊 デォデュウ

deodhu を掃除するという意味で，毎年旧暦 1 月の吉日に，村全体を閉鎖して多数のアシャンの手を借りて各世帯ずつ火を消す。アシャン（A 型・B 型 2 種類両方とも頼める）は集中的に豚と鶏を使って儀礼を行って，デォチュウを村から追い払う。その後で，各家族は新しい火種を取って帰る。またチェガンは火事があったり，野獣が村に侵入したりした場合に臨時に行われる。

3. 人生儀礼

名づけの儀礼では，子供が生まれて 20 日間以後の吉日に，2 種類のアシャンに任意に頼んで占いを通して名前を選ぶ。葬式では，いくつかの段階で 2 種類のアシャンそれぞれの神秘的な力を借りて死者の変化した三つの霊をそれぞれ適切な場所に導く。埋葬前の儀礼には 2 種類のアシャン両方とも執行できる。埋葬以後の儀礼は，アシャン A 型しか執行できない。

4. 生産活動

大型家畜の売買や屠畜および家畜の後には，2 種類のアシャンどちらでも任意に頼んで呪文を唱えてもらって家畜の繁殖と安寧を祈る。

5. 治療儀礼

病気は魂が悪霊ガシャチュウに身体から奪われて離れるために起こると考えられる。この場合に，アシャン A 型に頼んでどの悪霊が祟っているかを探り，犠牲を決めた上で，離れた魂を見つけてくる儀礼を行う。

6. 家の建築と橋の儀礼

家の建築において，主柱や門を立てるときに，2 種類のアシャンに任意に頼んでニワトリを捧げて呪文を唱えて厄除けの儀礼を行う。建築が完成してから，普通のダムイをもつアシャン A 型が主宰するガドウシャ gadosya（神樹を植えるという意味）の儀礼を必ず行う。その際，家を支える主柱のそばに根つきの竹枝を 3 本立て掛けて，家の安全とその家の子供が丈夫に育つように祈願をする。神樹ドウシャは 1 年に 1 回，あるいはモガヌォができるアシャン A 型の災因・病因の判断により何回も祀る。毎回，竹枝 1 本を加えてニワトリあるいは小魚を使って儀礼を行う。

また，各家の男の子供がそれぞれ所有する橋（デュ dhu）が村内のあちこちにある。その橋は，子が生まれるように懇願した後に男の子が生まれた場合に設けられ，彼と一生の関係を結んで祀られる対象である。それに，家の敷居の内外の地面に子供を求めたり健康を保ったりするために埋めた単数 (3, 5, 7) の木板も橋と呼ばれる。初めて橋をかける（埋める）際には，2 種類のアシャンを任意に頼んで儀礼を行う。

7. 異常の事情とタブーの違反の場合

「ガノォウ」人の生活において，災厄の原因或いは災厄自体と判断することは，自分でもっている常識にそむく事情があった場合である。そのときに一般的には，ダムイソしかもたないアシャン B 型に頼んで厄除けの儀礼を行われなければならない。例えば，家畜の豚が自分で生んだ子豚を食べた場合や，家を出るときに蛇の交配に遇ったなど場合にアシャン B 型に頼む。そのほかにもいろいろな異常事が不幸と災厄の原因として禁忌されている。異常なことが発生したら，儀礼は行われるべきだとされる。例えば，家を出るときに蛇の交配に遇った場合である。

要するに，儀礼において村人がアシャンの助けを必要とするのは，ヒョウやチュウなどとの付き合いなくしては切り抜けられないような場合に限る。霊界に存在する死霊のチュウ以外のヒョウに対して，通常は人間界のフォダと霊界のフォヒョウの境界を乗り越える必要がない場合には，2 種類のアシャン

８人全員だれにでも世話になれる。しかし，そのようなヒョウに対する祭りにおいて，祭田や子供に名前を付ける場合には，アシャンの立会いはかならず必要と言うものではないらしい。一方では，空間的には不確定な存在である死霊チュウに対しての空間の境界を越える儀礼の場合，例えば病気治療や葬式の埋葬以後の段階の儀礼では，異種の空間を渡るモガヌォができるアシャンが必要となる。シャーマンと祭司のように分業化されたＡ型・Ｂ型の２種類のアシャンは，村人にとってはＢ型がＡ型より少し劣位にみなされている。この評価は，モガヌォができるかできないかに基づいていると思われる。

V.　葬礼から見た２種類のアシャン

「ガノォウ」人の葬式において，他界観では故人の霊魂が三つに変化するという認識に応じて，葬礼の各段階[3]は，三つの霊魂が墓，家，祖先の集まる場所というそれぞれの行くところをめぐる儀礼を中心として行われる。行くべきところあるべきところに霊魂を届けたり取り戻したりするアシャンも，その三つの任務を果たすことに役に立つ。以下では葬式における一連の儀礼から，２種類のアシャンの能力や役割や性格上の区別が集中的に現れる様相を見ていくことにする。

1.　出棺

死体を家から墓へ運んで埋葬する際，まずはアシャンＢ型に頼んで死者の霊を家から外へ呼び出すことが必要である。儀礼は次のように行う。

アシャンＢ型は死者の兄弟姉妹から贈ってもらった鶏と茅草を手にもって，米を少量ずつ敷居の外に散らしながら，呪文を繰り返して唱えたり，小竹を使って占ったりする。呪文の要旨は「死んだ人よ，自分の世界に行ってください。他人に祟らないように」である。占いが順卦（吉）だったら，鶏の右爪を切って茅草で巻いて屋敷に捨てる。儀礼の間に，死者の兄弟姉妹は順番に鶏を捧げる（写真１）。

儀礼が終わってから，漢族の陰陽師が浄水と米と呪符を使って出棺の具体的時刻を占う。

2.　葬送　ツンナイ tunnai

棺をあげる際に，死者が使った衣装と布団などが外に出される。葬送の途中の第一の岐路で，死者が

写真１　出棺時の儀礼におけるＢ型アシャン

使った物と洗屍用の盆を置き，死者を埋葬した後に壊して焼く。

葬送の行列は，以下の順序である。

i．先頭に立つものはユゴン yugonn（道を導く）という。アシャン B 型（刀を手にもつ）と死者の息子（白紙幟を立てる）。

ii．男性の遺族，親戚と弔客（死者へのささげ物と松明などをもつ）

iii．棺（途中で地面に置くといけない。棺の上に 1 匹の鶏を載せる）

iv．死者の女性の遺族，親戚と弔客

3．埋葬　ボバニャン bobanyann（墓を積み上げる）

墓の場所に着いたら，まず穴を整地する。アシャン B 型は棺の上に立ち，銀片 3 枚を棺体に嵌め込み，死者への捧げ物（酒，糯米飯の団子，鶏の爪，死者生前の好物の鳥箱や魚網など）を棺の側に置く。そして，鶏を棺に叩きつけて殺す。棺から木片を 3 刀切る。刀を振りながら，呪文を読む。要旨は「太陽はあちらから昇り，あちらのほうに沈む。河はあちらに流れる。あなたよ，祖先の所への方向を迷わないように」である。そして，棺から取った木片を拾い，死者の息子に渡す（家に帰ったら，神樹ドウシャに載せる）。その後，死者の息子をはじめ，若い男性は土を荒っぽく被せる。

4．チダ tida（もう 1 回山に行く）

埋葬後の翌日，死者の息子と親族の弔客はアシャン B 型と一緒にまた墓の場所に行き，墓に完全に土を被せる。そのとき，つぶした豚の頭と糯米飯，魚，酒を死者への捧げ物としてもっていく。供物を置くために十字架を立てる。そして，死者の息子は死者の霊魂を家に呼び戻す。チダの儀礼では，アシャンを頼まない家族もある。

5．バゲネイヌォ bageneinuo（ご飯を送って差し上げる）

死者が死後 28 日目に行う儀礼である。バゲネイヌォ bagenuo というのは，途中のご飯を送るという意味である。その日，埋葬式に参加しなかった死者の同世代の兄弟と埋葬に参加した親族だけが，故人の家に糯米飯や豚肉や魚などをもって揃う。儀礼の際，アシャン A 型に頼んで，霊界フォヒョウに赴き，霊の道のゴンヒョウにいる死者の霊魂が祖先の発祥地ゼニョに着いたかどうかを確かめる。そのときに，アシャン A 型がトランス状態のモガヌォになって呪文を唱えながら，死者の一番懐かしく思っている親族の一人を指し示すと，その人がもってきた糯米飯を堂屋に並べたご飯の中から弁別してくる。

以下はアシャン A 型によるバゲネイヌォの儀礼における順序である。

i．アシャンはまず腰掛に座り，刀を米の中に差し込んで茶碗を刀先に立たせるなどの技を見せる。そして，呪文を唱えながら占卜ピャンロをして弔客がもってきた糯米御飯や豚肉や魚を堂屋の中央に並べる。

ii．刀を身辺に置いて専用のタオルなどで顔を覆う。線香の灰を呑却して（ノンアォチュ nonaotyu と呼ぶ）両手を膝において両脚が連続的に震え出し，モガヌォの状態になる。それから，呪文を唱えるに際して必要となる自分のダムイたち（通常何十名か必要である）を一つずつ呼び出す。これをゴダムイ gudamui と呼び，ダムイを組み立てるという意味である（写真 2）。

iii．ダムイたちと一緒に霊の路であるゴンヒュウに沿ってフォヒョウに赴く。その際，助手ランと対話しながら死者の死因や家族の災厄の兆しなどを示したり，死者の口ぶりでその要求や途中の状況を述べたりする。

iv．ピャンロをしながらどちらの弔問客を一番気に入ったのかを告げ，最初に並べた糯米飯の中から

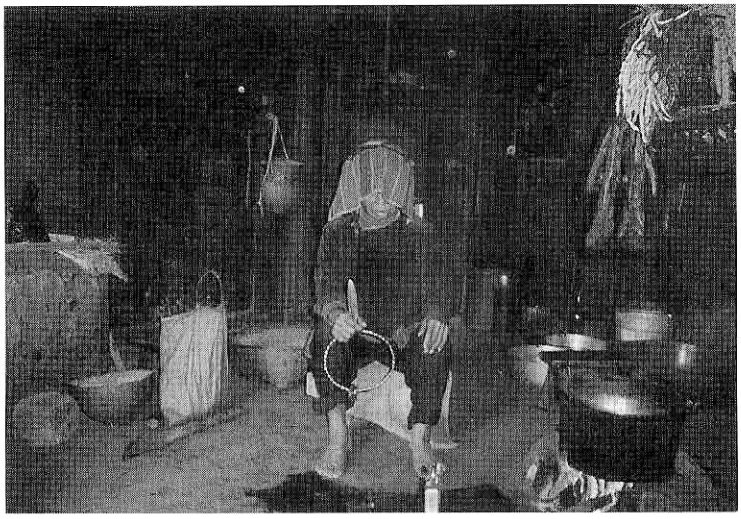


写真２　憑依状態になったＡ型アシャン

その人物がもってきたものを指し示す。

Ｓ村の場合は，普通のダムイをもちモガヌォ儀礼ができるアシャンＡ型が６人いるが，うちで白氏Ｃのアシャン Ａ型しか葬礼におけるバゲネイヌォという儀礼を務められない。この人の特殊な能力がもっとも上位と考えられる。

以上のように，アシャンＢ型は死者埋葬前の出棺の儀礼において死霊を屋敷から引き出したり，葬送の行列において死者の霊が墓に行く道を導いたりして，祭司のような役割を果たす。そして，Ａ型アシャンは，埋葬後のバゲネイヌォの儀礼において死霊が転生できる場所に至ったかなどについて確認したりすることから，人間界と霊界のフォチュウ，生者と死者の間の媒介者となっていて，シャーマンに相当する。２種類のアシャンは，霊魂を操ったり，生者・死者との葛藤的な関係を調整したりする方式が相互に異なる。

VI. 考　　察

前述したように，アシャンはダムイの所有の状況により２種類に分けられる。具体的には普通のダムイをもつアシャンＡ型とダムイソをもつアシャンＢ型の神秘力には格差があり，職能者アシャンが霊界フォヒョウに赴けるかどうかを基準として２種類に分けられる。そして，守護霊ダムイとその継承は親族関係との結びつきが強く，アシャンとなるために不可欠なダムイ（普通のダムイとダムイソ両方とも）が父系リネージの祖先であったり父系リネージの先人であったりするために，村落社会においてアシャンの二つの類型が親族組織と緊密な関係にあることが顕著である。ゼＩからゼIVまでのリネージから出るアシャンはＡ型，ゼＶから出るアシャンはＢ型である。Ａ型は第二次入植者，Ｂ型は後来の外来者である。特に２種類のアシャンのうちＡ型が，村における第二次入植者であり，各大リネージの「ゼ」においてより平均的に分布することは，宗教職能者とその２種類の類型が村落社会の権力構造を反映することを示唆しているのだろう。アシャンは村落の草分け筋のリネージからは現れず，第二次入植者やより新しい後来者，つまり「よそ者」から出現するのであり，後者も２種に差異化されている。

宗教的職能者は，村落の「よそ者」つまり異人 stranger という社会の境界を越える人々の社会的距離と関連づけられている。

また，儀礼において，アシャンＢ型の場合には，儀礼を行う能力をもっていることが社会的に認められているが，儀礼においては，供犠と呪文だけを通して人間がヒョウに向かって一方的に呼びかけたり要請したりするだけで，アシャンの人格と彼らが「所有」する抽象的なカテゴリーのダムイソとは，区別が明確になっているような事態が見られるのだ。ダムイソをもつアシャンＢ型は，社会的に決まっていて誰もが認めるような供儀や呪文のみを用いる儀礼によって，伝統的な権威を確認する祭司としての役割を果たす。これに対して，普通のダムイを所有するアシャンＡ型の場合には，憑依霊ダムイの所有とダムイへの供犠を通して治療や託宣などの能力をもつようになる。その能力を身に付ける過程やモガヌォ儀礼では，トランス状態に入りアシャンの人格と守護霊ダムイの関係性は単純に受動と能動として見ることができない主体性の交錯する双方向的な状況が生じている。要するにモガヌォでは統御的行為の主体が転換し続け，たまには錯綜する。ダムイを「所有」するようになる状況において，たいていのアシャンは，霊が自分の身体に「一つずつ当面に迫るように」感じると説明するが，モガヌォの儀礼においては，ダムイが何らかの人格の形を借りて人間に呼びかけてくる。アシャンの語りは，その言葉とその助手との対話の中での人称の使い方から見れば，三人称（守護霊ダムイ）の語りと一人称（アシャン本人）の語りが混淆・浸透している。また，モガヌォに際しては，タオルを使って顔を隠すことで，アシャン本人の姿を消して，別の「人格」となり，複数の人格に転換できることを可能とする。このように主体が流動化するモガヌォは，アシャンの個人の資質によるところが大きくなる。これがＡ型の特徴である。語る主体がダムイそのものであったりアシャン本人であったりすることは，アシャンとダムイとが折衝を繰り返して，アシャンが自己の境界を越えて，他者（守護霊ダムイ）との浸透的な相互関係を形成するといえよう。すなわち，その儀礼において，アシャンの主体性が曖昧になっている。

従来のシャーマン・祭司についての研究における職能者の分化や類型の検討や，シャーマン・祭司・王という枠組や，儀礼に集中した権力関係の分析などを批判的に検討してきた。中国貴州省ミャオ族の特定の村落社会での考察では従来の研究で捉えきれない側面がある。このように，宗教職能者を民俗観念や親族関係や儀礼過程の文脈に基づいて総合的に考察するアプローチは今後も必要であろう。

注

1) 「鼓社」は昔ミャオ族社会における父系出自に基づく儀礼的・政治的村落連合であり，現在中国貴州省東南部のみ残存している。鈴木 (1985, 1990, 1999, 2002) 参照。
2) 「ガノォウ」人の信仰におけるヒョウ hyou の集団や名称については，李　廷貴 (1991) の現地調査による研究があるが，筆者の現地調査に基づいたデータとは多少相違がある。また，湖南省湘西ミャオ族社会における鬼の信仰と，鬼の集団的分類については，凌　純声・芮　逸夫 (1947) が詳細的に記録した。
3) 貴州省苗族の葬礼における各段階の行事について，鈴木・金丸 (1985) 参照。

参考文献

佐々木宏幹・村武精一編 1988『宗教人類学』新曜社
桜井徳太郎編 1990『シャーマニズムとその周辺』第一書房
鈴木正崇・金丸良子著 1985『西南中国の少数民族：貴州省苗族民俗誌』古今書院
鈴木正崇 1984「中国貴州省・苗族の村」『季刊民族学』27 号　千里文化財団
――― 1992「苗族の神話と祭祀―鼓社節を中心として―」『日中文化研究』3 号 勉誠社
――― 1999「祖先祭祀の変容―中国貴州省苗族の鼓社節の場合―」宮家準編『民俗宗教の地平』春秋社

――― 2000「苗族の巫女さんたち―中国・湖南の場合」星野　紘・野村伸一編『歌・踊り・祈りのアジア』勉誠出版

――― 2002「死者と生者―中国貴州省苗族の祖先祭祀―」『日吉紀要　言語・文化・コミュニケーション』No. 29

田中雅一 1990「司祭と霊媒―スリランカ・タミル漁村における村落祭祀の分業関係をめぐって」『国立民族学博物館研究報告』15巻2号

常見純一 1967「霊魂・祖先・シャーマニズム・親族組織・世界観の関係―ミャオ族における一霊魂制と三霊魂制」『祖先観と社会構造』(日本民族学会第6回研究大会)

宮家　準・鈴木正崇編 1994『東アジアのシャーマニズムと民俗』勁草書房

Diamond, Norma 1988 The Miao and poison:interaction on China's frontier, Ethnology, 27(1): 1–25.

Lewis, I. M. 1978 Ecstatic Religion—An Anthropological Study of Spirit Possession and Shamanism—, London: Penguin Books Ltd, (平沼孝之訳『エクスタシーの人類学: 憑依とシャーマニズム』法政大学出版局 1985)

Mandelbaum, D. G. Introduction: Process and Structure in South Asian Religion, in: E. B. Harper (ed.), Religion in South Asia, Seattle: University of Washington Press, 1964, p. 10.

李　廷貴 1991『雷公山上的苗家』貴州民族出版社

雷山県県誌編纂委員会編 1992『雷山県誌』貴州人民出版社

凌　純声・芮　逸夫 1947『湘西苗族調査報告』上, 下　商务印书馆

張永祥主編 1990『苗漢詞典 (黔東方言)』貴州民族出版